

懐かしき友へ

井上 淳



自由の女神



井上 淳

OLD FRIENDS

懐かしき友

オールド・フレンズ



著者略歴

井上 淳・いのうえ
きよし 昭和二七年名
古屋生れ。同五一年早
稲田大学政治経済学部
を卒業。その後、経済
誌で編集記者、主とし
て証券、金融畑を担当
する。五七年退職、現
在フリー・ライター。

懐かしき友へ——オールド・フレンズ——	定価 一二〇〇円	昭和五十九年六月二十日 第二刷	著者 井上 淳	発行者 西永達夫	発行所 株式会社 文藝春秋	102 東京都千代田区紀尾井町三—二三	印刷所 凸版印刷	製本所 大口製本	カ一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします
---------------------	----------	-----------------	---------	----------	---------------	---------------------	----------	----------	----------------------

懐かしき友へ——オールド・フレンズ——

装帧
沢田重隆

ブ ロ ー グ

三月十二日——ヒースロー・ロンドン

ブラッセルとロンドンを、サベナ航空のジェット機が約一時間で結ぶ。しかし実際のところ、機体が空中にある時間はせいぜい四十五分たらずだろう。

したがって飛行機は、上昇を終えると、ほとんど計器飛行をすることなく下降に移らなければならない。航跡を追うと、ちょうどドーヴァー海峡の上空あたりを頂点に、放物線を描くのである。

EC圏内とはいえ、それでもいちおう国際線である。この短い飛行のあいだに、機内では茶菓のサービスがおこなわれる。コーヒーと小さなデニッシュペストリていどのものだが、こんな早朝便の場合には、朝食もそこそこに慌てて空港に駆けつける乗客も多い。一刻の腹ふさぎにはなってくれるから、けっこう重宝がられている。

けれども今朝にかぎっては、そのサービスが乗客にとって、とんだ有難迷惑になったようだ。

春先の大陸は、きわめて不安定な気候のなかに置かれるが、ブラッセルには昨日の昼さがりから、相当激しい雨が降り続いていた。めずらしい長雨だが、そのせいか発生した擾乱気流に、ボーイング七三七はさんざん揺さぶられた。

百人余りの乗客は、コーヒーを啜るより、まずこぼさぬようにカップをしっかり確保するために、必死の苦勞を強いられた。

はちきれるほど肥ったイタリア人の乗客は隣席のトマス・ゲイルに、この機に乗りあわせた不運と機長の手腕を、ひどい訛の英語で離陸した瞬間からずっと嘆きかけていた。何も聞いてはいなかったが、ゲイルはその話に辛抱がよくいちいちうなずきかえした。ゆでたまごのようにすっかり禿げあがったゲイルが柔和な面持ちで頭を振りおろすと、イタリア人は我が意を得たりとますます勢いづいた。しかし機長は、彼が口汚なくののしったほど未熟ではなかった。

「かなりの老いばれ機だから、あんまり揺らすと、床が落ちるぞ」

ヴェテラン機長は、あやしなだめるように操縦桿をあやつる副操縦士に、そんな冗談をたたいていた。スチュワーデスたちも、ペストリの油と砂糖の臭いが乗客に吐き気をもよおさせないことだけを祈った。

そうした騒乱のあぐく、ボーイングはヒースローの滑走路に、よたよたとすべりこむ。乗客はかっきり四十五分で、地獄から解放されたのだ。

ヒースローはまだかろうじて乾いていた。まるで水面に墨汁をたらしたように、暗い雲が厚く重く、ロンドンの空にのしかかっている。そのどんよりした雲のかたまりにつぎつぎと飛行機が突きささり、すぐに呑みこまれていく。もういちどくりと刺激されたら大粒の涙をほとほとこぼしそうな、しかめ面をした空模様だった。

機体が静止し、乗客たちは、タラップがとりつけられる間も惜しむように我がちにシートベルトを外して立ちあがった。脚が地に着いた安心からだろう、機長への不信がいっそう声高に飛び交う。やけばちに手を鳴らす者もいた。

すでに肩から荷物を吊るしたイタリア人は、ゲイルに屈みこむように、

「だから、こんなジュラルミンの棺桶が、空を飛んじゃいけないんだ」

そう吐き捨てて足早に出口にむかった。

これで、ゲイルもまた、イタリア訛の地獄から解放されたわけである。彼は、素直にそれを喜ん

だ。

あわただしい機内で、しかしゲイルは腰を落着け、扉附近の混雑ぶりを眺めていた。ここで遅れても、恐らくどの乗客よりも早く税関にたどりつく。彼は、そう計算していた。

この調子なら、乗客たちはバゲッジコントロールで、再び忍耐力を試されるだろう。ゲイルは、荷物を預けてはいない。ふたつ折りのスーツホルダーは座席の下にあるし、薄手のアクアスキュータムとブラッセル土産のチョコレートの小箱は、どちらも膝のうえだ。

「我が人生は、まだプレリユード。焦ることはない」

ゲイルは、ゆっくりと大きな伸びをした。膝に乗せた平たい円筒型の箱にあしらってある淡色のリボンを、そっと指でなぞる。

中には、桜桃の実ほどのチョコレートがいくつか入っていた。

欧州の町には、必ずといってもいいくらいチョコレートの専門店がある。ベルギーも、スイスと並んで有名だが、やはりそれぞれの国によって微妙に味わいが違っている。デンマークやオランダのは、濃厚な脂肪分で満腹感さえ覚えさせられるが、それに比べればベルギー製品はあっさりしている。むしろ苦味が勝っていて、虫歯だらけの子供向けではない。

それが、ゲイルにとっては格好の肴になった。今晚の酒の旨さを見ると、胸がじんわりと温かくなってくる。ブラッセルには三つばかり名高い専門店があるが、彼の最良は、グラン・プラスわきのゴディヴァだった。

ゲイルは、いちばん最後にタラップを降りた。スチュワーデスが、ほっとしたような笑みを彼におくった。

狭い回廊を抜けて税関前の人ごみを見たゲイルは、あっさりと、目論見が外れたことを知った。ラッシュのタイミングではないが、前便の客がつかえているのだろう、すでに長い列ができている。

さすがにゲイルも少しく焦燥を感じ、うんざりした表情で、その長い列の後尾に並んだ。

その彼を待っていたかのように、前列の婦人が振りかえった。捕虫網に似た帽子と、モード雑誌そのままの最新パリコレクションで飾りたてている。しかし、鼻を刺すほどのきつい香水も、頬のあたりのたるみは隠しようもない。

傍に置いたスーツケースは、レスラーひとりぐらいなら、うまく折りたたんで入れられる大きさだ。同情を押しつけるように、

「一時間は、覚悟なさっておいたほうが、よさそうですね」
彼女はゲイルに話しかけた。

その退屈な時間を潰すために、どうやらゲイルを犠牲に選ぶつもりだ。けれども、彼の寛容の貯蓄は、イタリア男の相手だけでほとんど底をついていた。

プラスチックで固めたような微笑を浮べて、ゲイルはそこからさきの会話を、きっぱり拒絶してみた。

「こんなありきまでは、きつとタクシー乗り場でも、ずいぶん待たされること……でしょうね」
氣勢をそがれて、彼女の愚痴は途中から、あてのないひとりごつのように虚しく響いた。

確かにゲイルたちは、入国管理と税関で、たつぷり三十分以上待たされた。そのあいだじゅう、ゲイルを捉えそこなった婦人は、格好よく整形した鼻に小皺を寄せて、周囲に何かぶつぶつと毒を含んだ言葉を撒きちらした。

ゲイルはそれを眺めながら、彼女の横顔にディズニー漫画で見慣れたいじわる夫人を連想して楽しんだ。

ようやくのことで税関を抜けると、とたんにロンドン特有のかび臭さがゲイルをつつみこむ。

彼はそっと溜息をもらした。この、湿気と歴史とが幾重にもおりかさなった石造りの街の臭いにとりまかれると、彼は安堵にも似た感情を取り戻す。

ゲイルは世界のどこよりも、このすすけた街を愛していた。小さなホテルの一室をロンドンに借り

て、そこを足がかりに欧州をあちこち訪ね歩くことが、彼の永年の夢だった。

それを現在ようやく実現させ、まず十日ばかり周遊したベルギーからの帰途である。とりたてて、ベルギーを最初の目的地に選んだ理由はない。NATOの本部がある関係上、比較的馴染みがあっただけだ。

しかしそれでも、街は、仕事で訪ねたときとは全く違ったきらびやかな色彩にあふれていた。プラッセルはもちろん、運河の町ブリュージュも、彼をじゅうぶんに満足させてくれた。

ゲイルは旺盛な意欲で、ベルギー国内を歩きまわった。ブリュージュでは三百六十六段の鐘楼にも登った。少し息はあがったが、脚力がほとんど衰えていないことを改めて発見して、彼は喜んだものだ。

この十日間のほてりが、まだゲイルの心のどこかにしつかりと残っている。

彼は最初からタクシーをあきらめていた。ヒースローはもともとタクシー乗り場が少ないのである。この空港は、管制員の抜き打ちストをはじめ、いろいろと悪評が高い。そして、タクシーの便の悪さがその悪評に拍車をかけているようだ。

それをわずかながら救うのが、空港名物の白タクである。もちろん車両も黒塗りのオースチンよりずっと狭くなるし、料金もほぼ二倍にはねあがる。荷物をトランクに入れてしまい、乗客が高い料金をしぶしぶ払い終わるまでそれを開けないあたりは、ニューヨークと同じやりかただ。しかしニューヨークのそれと異なって運転手にサーブス精神があり、わざわざ回り道をして市内見物をさせたりするので意外に人気があった。料金は先決めなので、名所見物のおまけがあれば結局安いものにつく。

けれども彼等は主に東洋人を獲物に狙っていて、ゲイルのような旅慣れた格好の白人にはなかなか声をかけてこない。

タクシー乗り場の混雑を横目に、ゲイルはまっすぐ地下鉄の駅に向った。

空港の敷地内に、地下鉄ピカデリー線の終着駅であるヒースロー中央駅が置かれている。

ゲイルのホテルがあるグロヴェナー・ロード駅までは、乗り換えなしで四十分たらずだ。

この時間帯なら、列車は五分に一本ほどの割で中央駅を発車する。

思ったより空いていて、ゲイルは中ほどの車両の最後列のシートに席を得ることができた。向いあつてふたりずつが座る四人シートの、通路側である。

彼の正面には、流行のパンクファッションの少女が腰掛けていた。

頭をきれいにそりあげているが、頭頂部にほんのひとにぎりだけ鶏冠^{とさか}のように、あざやかな緑色の髪を残してある。ストーンウォッシュの革ジャンパーに巻きつけた細い金鎖をもてあそんで鳴らしながら、ガムを噛んでいた。口もとに甘ったるいストロベリーの香りをただよわせながら、すべての世間を射るような挑戦的な眼つきだった。

ゲイルは、曖昧に視線を宙に浮かせた。

車両の後部の壁には、

「乗務員を殺害せし者は、理由の如何を問わず終身刑に処す」

と、不気味な警告が貼りつけられている。

ニューヨークが顕著な例だが、先進都市の地下鉄は、どこもさまざまな犯罪の温床となりつつある。風景のない暗黒の閉鎖空間が、人間の心理を圧迫して、本来の野性を揺り起こすせいかもしれない。最近ロンドンでも、地下鉄の乗員が襲われる事件が相次いだ。

警告はそのため、存外効果があるらしい。

列車は、二駅三駅過ぎて地下にもぐりこんだ。

騒音と振動がぐんとはげしさを増す。

ゲイルは、自分の幸運をゆっくりと反芻しはじめた。

彼が、それまで四半世紀つとめた仕事を引退したのは、おとしの秋だった。仕事は簡単にいえば、米国中央情報局のためのものだった。ゲイルは朝鮮戦争時代、陸軍の諜報部に配属されたが、そこで

の手腕が買われたのである。

といってゲイルは、CIAに直接雇われたわけではない。ラングレーとゲイルのあいだには、仲間うちでトレイダーと呼ばれる小さな組織が介在し、CIAからすれば、いわば彼は孫会社の社員にあたる。国際政治力学がこうした複雑かつ奇妙な仕組みを要求するのは、まああることだろう。

そこでゲイルはずっと、「どぶきらい」と称する任務にたずさわってきた。端的には、中南米諸国における破壊工作である。彼は世界じゅうを駆けめぐって、暗殺、革命勢力の裏面援助、そして裏切りといった、とても履歴書には記せそうもない薄汚れた仕事を続けた。

ゲイルは決して凡庸な野戦工作員ではなく、公式には誰も認めない、叙勲名簿に載ることもない武功をいくつかたてた。組織も彼を相当に評価していた。米国にとっても、彼はきわめて便利な存在だった。

結局、ゲイルのように、二十数年の経験を持ち一応の手腕があるフィールドエイジェントが組織ときれいさっぱり訣別しようとするれば、三とおりの方法しかない。

ひとつめは、最もありふれた例だが、工作員自身が、年齢による能力の衰えと時代の変化を、じゅうぶんに認識できなかった場合である。こうなると工作員は、任務途中で予期せぬ事故に遭遇し、永遠に組織を離れることになる。もっともこれは工作員の責任に帰する部分が大きく、同情の余地はほとんどない。

次は、それと逆の場合だ。能力を過信したり時代の流れに敏感すぎたりする工作員は、組織によって用意された事故のために、悲惨な結末を遂げる。しかしこの場合は、もしダイスがうまく転がると、ベストセラーをものしたりで一躍社交界にデヴュできることもないではない。力量のある工作員ほどこの蠱惑の罠に陥りやすく、実はいつときゲイルも、その軌道を脳裏に描いていた。成功と失敗の落差が非常に開いた方法だが、現実には、ダイスはそうしばしば望みどおりに転がってくれるものではない。

そしてみつつめが、能力を実際よりほんの少し低く見積り、時代とベッドをともししてきた場合だ。これは最も簡単な方法である。作業員は、黙っておとなしく戦場を去り、組織は、コンピュータのコードをちょっといじってその作業員の知識を全く無価値なものにすれば、それで済む。もちろん、作業員の「舌を抜く」ために煩雑な手続きが踏まれるが、あくまでそれは儀式にすぎない。作業員はその瞬間から、味方と敵の両側から時代遅れの屑とみなされる。最も安全で自然な方法だが、これで引退できる作業員は稀有である。

第二の方途を考えていたゲイルだが、あるときから、最終目標を第三のそれに置き換えた。

数年前ゲイルは、アマゾン奥地で破壊任務についていた。ゲイルの能力からすれば、単純な作業になるはずだった。そろそろ頭はさびしくなりかけていたし、腰のまわりには指でつまめるほどの贅肉が付きはじめていたが、自信だけは少しも縮んではいなかった。

しかし、ゲイルは作戦の詰めを誤った。

名も知れぬ植物の根から抽出した、どんな化学合成物よりも確実な毒を塗りつけた原始的兵器が、おもしろいように作業員を斃し、しなやかな筋肉の化け物たちはゲイルを追いつめた。彼は生まれて初めて味わう恐怖に戦慄し、小便を洩らした。

それ以来、ゲイルははつきりと目標を置き換え、そして、成功した。

その幸運が奇蹟と呼んだ。永劫とも思われるほど長い時間、彼の人生にへばりついて離れなかった妻が、あっさり自動車に跳ね飛ばされたのである。ゲイルは巨額の保険金と魂の解放を得、それが、彼の温めてきた夢を具体化した。

ゲイルの人生は、この霧の街で、まさに始まったばかりなのである。

思わず口もとをほころばせたゲイルを侮蔑するように、緑色の鶏冠の少女は目を細めた。列車がカーブにさしかかり、悲鳴をあげるように車体を軋ませた。

三月十五日——ワシントン

ワシントンには、春と呼べるだけの季節は永遠に訪れてはこない。

厳しく陰鬱な冬と、気違い陽気の夏とが、この街の一年をふたつにわちあつて激しくせめぎあう。そのあいだにばかりと開いた間隙に、人びとは春の面影を追うのである。

しばらくは、じんわりと汗ばむような日が続いた。しかし昨夜は唐突に冷えこみ、ほんのわずかが雪さえ舞った。

その名残りの寒風が、車椅子のウィンストン・シンクレアにも容赦なく吹きつけた。

車椅子の傍に立ったジム・パウトンは、コートの襟を合わせた。

「そろそろ車にお戻りになったほうが、よろしいのでは。どうも河風がきつすぎますから……」

彼はシンクレアのほうにかがみこんで、心配そうに話しかけた。

アーリントン国立墓地である。

白く化粧を変えた二百ヘクタールを越す広大な敷地には、遮るものとてなく、ポトマックからの風がまともに吹きつける。

パウトンの頬には、うつすらと血の色がにじみはじめていた。

「もうすこし、いいじゃあないか。私も、もう七十五だよ。これでコロンバスに帰ったら、またいつ来られるものかわからないからね」

微笑をうかべて、しかしシンクレアはそう答えた。

パウトンは、この枯枝のような老人がとてつもなく堅固な意志の持ち主であることを、よく理解していた。とりわけこうした表情のときは、もう梃子でも動かせない。

遠くから、無名兵士の墓を守る海兵隊員たちの交代の足音が聞こえる。

この凍てついた土の下には、老人の情熱が静かに眠っていた。アンドルー・マクミラン元大統領で

ある。

青春のはつらつきを残したマクミランが、合衆国国民の希望に背をおされ、はなばなしくホワイトハウスへの階段を駆けのぼったのは、まだほんの十年昔のことにすぎない。

マクミランとともに、合衆国はかつての輝きをとりもどし、そして再び世界に君臨するはずだった。けれども歴史は、しばしば皮肉ないたずらを好む。

マクミランは、最初の四年の任期すら全うできない運命にあった。大統領に就任して三年目の春、彼はテキサスの片田舎で、暗殺者の凶弾に斃れた。

黒人排斥集団のリーダー格であった若い狂信者が、犯人として、事件後二十四時間以内に州警察によって逮捕された。彼はロシア移民の血をひき、絶えず視線をあちこちさせる鬚むくの小男で、あっさり犯行を認めたが、公判を待たず拘留所の壁で頭を割って自殺した。その後、彼が凶器に利用したと主張した大口径のライフルから硝煙反応が認められなかったという噂が、まことしやかに囁かれた。彼のヴェトナム従軍時代の上官は地元新聞のインタヴューに応えて、

「奴は、一フィートのところからインド象にあてることもできなかった」と証言した。

マクミランは、オープンカーでの走行中をビルの屋上から狙撃されたのだが、むろん、銃口と彼との間は一フィート以上隔たっていた。

誰もその若者が真犯人であると考えてはいないようだったが、公式には、事件はそのまま処理された。世論は承知しなかった。KGBの陰謀から、CIAの内部抗争の犠牲者というもので、ありとある憶測が乱れ飛んだ。

現在に至るも、幾冊もの研究書が出版され、そのたびにマクミランは、神話を棺にまといつた。マクミランの死は、最も国民の興味をひく謎であった。

後に政府は、ある上院議員を首班に調査委員会を設けたが、数百万ドルの資金と長大な年月を費し

たその分析報告は、結局、件の若者を犯人と断定する結論だった。反対派はその電話帳ほどの報告書を、

「牽強附会な論理と、巧妙な事実曲解。詭弁の教科書」

として、一顧だに評価していない。

志なかばでの挫折を余儀なくされたマクミランを継いでホワイトハウスの主人となったのが、当時副大統領だったシンクレアである。当時の政治中枢のなかでシンクレアは、恐らく最も遅くマクミランの死を知った人間だったろう。遊説先のホテルで、彼は大統領護衛隊長官からの電話に寝いりばなを叩き起こされた。

「大統領が撃たれた。三十分前に病院にかつぎこんだが、部下の話では脳ミソが飛び散るのがはつきり見えたそう。遺憾ながら、まず助かるまい。となると、自動的にあなたが大統領だ。とりあえず我々は、マクミランの私邸につけてあったチームを、あなたの家に向わせている」

一方的にそれだけ喋ると、電話は切れた。その受話器に、
「オープンカーは危険だと、あれだけいっておいなのに」
と、シンクレアは虚しく叫んだ。

何と間拔けた反応だったろう。

今でも彼は、それを羞じている。

それから電話は一晩中鳴り続き、シンクレアを眠らせてはくれなかった。

合衆国の全国民のうち、明日に刑の執行を控えた死刑囚のつぎに、シンクレアは大統領になる可能性の薄い存在であるはずだった、とポスト紙は論評した。まさしく正鵠を射た記事であった。

なによりもシンクレア自身が、のちに回想録の中で述べている。

「当然私も、政事まつりごとの世界に足を踏み入れたばかりの頃は、頂点に立つ夢を抱いていた。しかし、何期か上院での活動を続けるうちに、私にはせいぜいロッキーマウンテンあたりの州知事がお似あいで、とても